

新技術 解説

クビアカツヤカミキリ羽化成虫の拡散を防止する廃漁網の利用方法

徳島県立農林水産総合技術支援センター **なかの 野 昭 雄**
 兵庫県立人と自然の博物館 **みつ 三 橋 弘 宗**

はじめに

徳島県におけるクビアカツヤカミキリ *Aromia bungii* の発生は、2015年7月に板野郡板野町において、モモ、ウメとサクラで確認された。経済栽培のモモとウメでの被害は国内では初めての事例であった。とりわけ、モモでは発見当初から既に甚大な被害が数園で見られたことから生産現場からは早急にその対策を求められた（中野・渡邊，2017）。当時、防除に使用できる農薬がほとんどなかったことから、生産者には防除対策として成虫の捕殺、幼虫の捕殺・刺殺、ネット被覆による羽化成虫の拡散防止と被害樹の伐採・伐倒を進めてきた。しかし、このネット被覆による方法には解決すべき課題があった。一つ目にモモの樹形は2~3本主枝で仕立てられているので、サクラに比べて被覆作業に手間暇がかかること、二つ目に主に利用された目合い5mm程度の農業用ネットは成虫に容易に糸を噛み切れられ（図-1）、脱出されることである。二つ目の対策として、ネットと樹を



図-1 農業用ネットを噛み切る成虫

How to Use of Waste Fishing Nets to Prevent the Spread of the Red-Necked Longhorn Beetle, *Aromia bungii*. By Akio NAKANO and Hiromune MITSUHASHI

（キーワード：クビアカツヤカミキリ，廃漁網，モモ，被覆，拡散防止）

密着させない被覆方法が宗實（2021）によって考案されたが、モモでは前述したような樹形から作業はより困難となった。これらから、本県のモモの生産現場ではネット被覆を実践する生産者は極めて少なかった。しかし、成虫の羽化時期がモモの収穫時期と重なることから、薬剤による防除に手間暇をかけられない生産者にとって、ネット被覆は本虫の分布拡大と被害増加を抑える重要な技術と考えられた。

そこで、農業用ネットに代わる被覆資材として廃漁網に着目し成虫拡散防止効果や作業性を検証したところ、その効果の高さと作業性の良さから本県の生産現場に普及しつつあるので、本稿ではその利用方法と利用に当たってのポイントを紹介する。

I 廃漁網利用の経緯

農業用ネットに代わる廃漁網利用の取組みは、共著者の三橋の発案で2021年より始まった。二つの点でこの資材に着目した。一つ目は漁網が過酷な操業環境に耐えて利用されているため、農業用ネットよりも強度が高く丈夫であること。つまり、農業用ネットよりも本虫に噛み切れにくいと考えられた。二つ目は使い尽くされ、いずれは捨てられる漁網、つまり無償または低料金での入手が想定される廃漁網を再利用することである。近年、レジ袋や飲料容器などのプラスチックごみによる海洋汚染が社会的に注目を集めているが、漁網などのプラスチック製の漁具はまだあまり社会的に認知されていない（豊島，2021）。環境省により業務を請け負った日本エヌ・ユー・エス株式会社が令和3年度に39都道府県の89地点を対象に実施した漂着ごみ組成調査によると、漂着ごみのうちプラスチック製の漁具等海域由来ごみが、個数では全体の38%とプラスチック製の容器包装ごみの36%と同等であったが、重量では前者が29%と後者の14%に比べてほぼ2倍を占めていた（日本エヌ・ユー・エス株式会社，2023）。漁具が流出してしまう原因は、意図的な投棄または放棄によるものから、悪天候などの非意図的な不可抗力によるものなど、様々である